一絃の琴

宮尾登美子

一絃の琴

宮尾登美子

講談社

一絃の琴

昭和五十三年十月二十日　第一刷発行
昭和五十四年二月二十日　第六刷発行

著　者　宮尾登美子
発行者　野間省一
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽二―一二―二一／郵便番号一一二
電話東京(〇三)九四五―一一一一(大代表)／振替東京八―三九三〇
印刷所　豊国印刷株式会社
製本所　大製株式会社
定　価　一一〇〇円

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします
© Tomiko Miyao 1978, Printed in Japan

0093-139797-2253 (0) (文1)

目次

第一部 7
第二部 119
第三部 159
第四部 299
あとがき 368

裝幀　舟橋菊男

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

一絃の琴

第一部

曲が終り、旅絵師の亀岡さんが指から蘆管を外したとき、それまで拳の背で目を拭っては涙を膝に移していた五つの苗はとうとう堪え切れなくなり、しゃくり上げながら祖母の傍に駈け寄って、

「おばば様、あのお方に早うご報謝さし上げて」

と頭を下げて頼んだ自分の姿を、苗はいまもときどき、ふと目に浮べる事がある。

あのとき、座敷中にはすぐ小さな笑い声が拡がり、父親の克巳は、日頃から禁じてある筈の人前での涙や、語尾を中断させるもの云いについては何も云わず、

「苗は何を取り違えておる。亀岡さんはお遍路ではないぞ。ご無礼を謝りなさい」

と、そう怖い声でなく窘めた事まで苗はよく憶えているのに、そのあとふっと掻き消えたように記憶は途切れて了っている。

五つと云う年は記憶がはだら斑らで、こんなに鮮やかな場面がきっかりと彫り込まれているかたわら、呆やけて忘れている部分もずい分多いが、ただ、この夜以来、毎年秋にはやって来ると云う亀岡さんの姿を苗は妙に強く待ち焦れるようになり、そのたびに祖母の袖の、袂の端を押えては根問いする習慣がついて了ったのも、それと云われてみれば思い起す事が出来る。

袖からはその都度、

「そうですのう。庭の猿柿が程良う熟れる頃になればおいでますかのう」
とか、
「雁の行列が高うに長うに見えるようになったら、現われますろうか」
とか、
「晩、瓦屋根に露が流れるようになれば必ず見えますぞよ」
とか、そのときどきの言葉で宥められていたが、のちに苗は自分でしっかりと試してみて、亀岡さんと会えるのは瓦屋根の光る頃がいちばん正確であるように思った。
と云うのは、絵道具と着換えを振分けにし、片方の肩には小さな軽い琴袋を背負った亀岡さんは旅程をどう繰廻すのか、この沢村家の滞在中に必ず仲秋明月を迎えるよう現われるためで、その後苗の記憶が一年一年確かになるにつれ、この情景も次第に澄んで蘇って来る。
沢村家の一同が亀岡さんの琴を聞くときはいつも決まって灯りを消しており、月光が斜めに差し込んで来る座敷に、透き徹った琴の音に聞き惚れていてふと目を上げると、庭木の向うの引棟の蚕室の黒い屋根瓦が月に照らされ、まるで青い露の流れるように冷たくきらかに光っていた様子を、苗は瞼の裏に灼きつけている。ときに月光は、琴を弾いている亀岡さんの右手の部分に止どまった儘いつまでも遊んでいる事があって、苗の頭にはお月様と亀岡さん、琴の音と露の流れる瓦が、その後もぴったりとくっついているのであった。
「この琴は遠音が利きません故に、秋口がいちばん音が宜しゅう御座います」
と亀岡さんは云い云いしていたが、年中旅から旅の数ある寄宿先のうち、事によると沢村家の人たちが最もこの琴を愛しているのを、亀岡さんも知っていたのではなかったろうか。
本職は絵師だから、亀岡さんは沢村家に旅装を解くと、いつも母屋の中敷に籠って昼間はこの

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

家のための襖絵や額、掛軸の下絵などを描き、夜食のあと筆を置いてから琴袋を開いて、丈の長さ四尺足らずの身軽な楽器の姿を取出す。

苗はあの五つのとき、琴を聞いているうち何とも云えぬ悲しさが涙とともにこみ上げて来て胸が戦いたけれど、あの悲しさは何だったかしらん、と後々もふと思返し、自分に問うてみるのであった。苗が思わずご報謝を、と口にしたために廻りは皆、苗が琴唄と巡礼の御詠歌とを混同したものと思ったろうが、苗はあのときも、鳴っているのは鈴でなく琴であり、弾いているのは儚げな遍路ではなく恰幅のよい亀岡さんである事だけは、子供心にちゃんと知っていたような気がする。ではどうして泣いたかと云えば、あの悲しさは、苗にはまだよく判らぬ人の世の儚なさ佗びしさと云うものだったかも知れず、そう云うふうに思いが伸びて来たのは苗が実際に琴を手にし、弾くようになり、少しずつ上達し始めてからの事であった。

沢村家では躾が厳しく、子供と云えども用もないのに客人の傍へ寄って行ったりなどしてはならないが、祖母の袖の口添えもあって苗が亀岡さんの琴に初めて触らせて貰ったのは、もう仮名なら全部読み書きも出来ていた、多分七つの年ではなかったかと思える。

亀岡さんを苗が待ち兼ねるのは、あのもの悲しい音いろの琴を聞きたいからであり、聞いて胸の溢れる思いをしたからには、自分も一人であんなふうに弾いてみたいと云う気も起きる。無論上手を目指す望みなど子供の苗にある筈はなく、云ってみれば人が麦笛を吹けば自分も、人が太鼓を叩けば自分も、程度の、人形さま遊びと大差ない好奇心からだったとは云え、ただ、弾けば人の涙さえ誘うもの故、仮初めな態度では弄れぬだけの考えはあった。

念願叶って亀岡さんの本四寸の末三寸、正確には長さ三尺六寸六分の桐胴の琴を両手に持たせてもらったとき、苗は思わず、

「まあかわいらしい」
と嬉しい声を挙げ、それからたった一本の糸が撓(たわ)みなくぴんと厳しく張られているのを見て、一瞬やはり身内がしんとするような感じを持った。
亀岡さんはこの琴を、京の公卿がたのようにゆったりと足を組みその膝の上に水平に載せ、蘆管を嵌(は)めた左手中指で糸のツボを抑えながら右手人差指の蘆管でゆっくりと、ときには早く、高低自在に掻き鳴らす。琴の胴には十二の譜がついていて、その印には胡麻粒ほどの螺鈿(らでん)細工が施されてあり、元の駒と末の糸巻は磨き込まれた鹿の角で作られてある。
苗がその琴を自分の膝に載せてみると、右手が撥(ばち)の用をなしている限り左手は上限の一の譜までは届かず、その上鹿角の蘆管も重くて大きすぎ、嵌めた端から畳の上にころころと転がって了う。あんなにも焦れていた琴の音の、折角触らせて貰ってもチンともツンとも弾けぬ事に殆ど泣きべそを掻きそうになっている苗を見て、亀岡さんは鷹揚に笑いながら、
「無理も御座いませぬなあ。蘆管の穴の小さいのを大きゅうするのはたやすいが、指を太らせよと云う相談はこれは一寸聞えませんものなあ」
それ程お好きならば、子供用のものを拵えて進ぜましょうか、と云うのを聞いて苗は夢ではあるまいかと思い、かたわらの祖母の顔をそっと窺うと、日頃容易に喜怒哀楽を見せぬ袖の表情は一瞬陽が差したほど明るくなり、その余り、気のせいか目尻さえうるませているかに見えた。
ひょっとするとこのとき、当の苗よりも祖母の袖のほうが実はもっと嬉しかったのではなかったろうか、と苗が後に思ったのは、自分を表に出さぬ事にかけてこの人ほどのもの堅さは先ず他に見当るまいと思える袖に取って、琴を聞くのがたった一つの楽しみであるのを知るようになってからの話であった。

沢村家は代々この土佐藩の留守居組に属する上士格で、当主克巳の代で知行百五十石を禄されているが、下士一人奉公人二人を抱えている割には、家に瓦屋根も葺き、こうしてときたま廻り者の絵師などを遊ばせる余裕があるのも、先祖伝来順調なご奉公で家運の傾いた時期がない上、邸が広くて大抵の物なら自給自足する習慣をつけているため、と云うのは藩内の目付け評であり、また事実でもあった。昔、山内一豊（やまのうちかずとよ）が土佐に封ぜられたとき、地高百二十四万石と書いた文書の百の字を鼠が嚙り、それ故幕府の表高は二十四万石となったと云う伝説があって、以来土佐では鼠を「お福さま」と呼んで大切にし、他藩からは財政の内福を羨ましがられていると云う話はいったい誰が流行らせた噂やら、外様の土佐藩では掛川六万石から山内氏が入国して来た当初終始銀不足に陥り、財政は常に窮屈だったと云う。

沢村家の古い系図を見ると、藩の御借上令はこれまでにいく度かあり、享保、宝暦、明和、安永、天明、文化年間に半知、或は四分一などの事実上減俸に等しい削減が行なわれているから、沢村家も元の禄高を云えば二百石以上、或は三百石に近い格式を持っていたのではなかったろうか。それだけに家名を少しでも損わぬよう身を慎しむべき事は沢村家の固い家訓となっており、それを裏から支える代々の嫁のなかでも袖は出色の出来人（できびと）、と云う評判が高く、この静かな屋敷町のなかでも娘の躾、嫁の戒めには、

「沢村のお袖様を見習え」

と云う言葉が生きて動いているのは、そう云うものが少しずつ崩れ始めている世情を映してでもいるのだろうか。

高知の城下町は、昔山内一豊が築城の際、播磨屋町を境に東側を町屋として六十間を一町、西側を足軽町、侍屋敷と定めてこちらは百間を一町とした区劃は、その後のいく度かの火災で大分

崩れてはいるが、城廓のなかの大高坂山、その西の小高坂山付近にはやはり昔ながらの士分の家ばかりで、沢村家はその一角の西町にあった。人が沢村家を指して桑屋敷と云い、苗の事を桑屋敷の嬢様などと呼ぶのは、ひと頃この広い邸内いっぱいに桑を植え、目立つほどたくさん蚕を飼っていた名残りでもあろうが、桑は今もすっかり根扱ぎしたわけではなく、袖一人がほそぼそ飼えるだけの株は残してある。

苗は小さいときから春蚕、夏蚕、初秋、の頃になると、まるで雨の降るような蚕のいっせいに桑を食む音を耳に馴染ませて育って来たのをなつかしく思い出す。

母の秀乃は長女の苗を産んだあと肥立ちが悪くて乳も出なかったから、苗はその時分、もう家督を息子夫婦に譲り、庭の蚕室を隠居所にしていた袖の手許に置かれてずっと大きくなった。たかが女の子の子育てくらいで乳母を雇うのは上に対して憚られ、さりとて貰い乳して歩くは家の恥を外に曝す事にもなり、と士分の分別とは窮屈なもので、このとき袖の発明と献身がなかったら苗はその頃多かった死に子のように、忽ち儚なくなっていたのかも知れなかった。袖の発明とは、孟宗竹を五寸ほどの深い椀型に切り、その下部に小さく開けた穴に見合う竹筒を差し込み、竹筒の先には紅絹を被せて糸で固く縛ってある。この哺乳筒に重湯や米の粉の溶き湯を入れて赤子に飲ませば、紅絹に漉されて消化不良になる心配も少なければ口が乳首に似て飲みやすくもあり、お蔭で苗は小粒ながら元気に堅肥りで育ったと云う。

苗はのちに、土蔵の重い扉を一人で開けられるほど大きくなってから悪戯半分で蔵に入ったときこれを見つけ、不思議なほど強い感動を覚えて駈け戻り袖に訊ねたところ、

「そうでしたのう。あの時分は日がな一日夜がな夜知らず、そなたに付き添うておりましたもののう」

と別に手柄顔をするでもなく云うのを聞いて、胸の内にふっと明るい光が差し込んだように思った。

苗の記憶は、亀岡さんの琴を聞いて泣いたあの五つのとき以前にも朧気ながら断片的に残っているが、その孰れも祖母と自分、或いは他人を交えていても其処に必ず祖母の姿がある情景ばかり、例えば蹲んで上り蚕を蜂の巣籠に入れる祖母の傍で、その一つを指に這わせながら擽ったさに声を上げて笑っていた自分、また達磨と云う糸取り機を足で踏んでいる祖母の脇に立ち、鍋の中の繭からか細い糸がするすると絶え間なく糸巻に巻き取られてゆくのを飽きもせず眺めていた自分、或いは正月十一日の馬場の乗初式に出掛けてゆく陣笠姿の父を、一家揃って玄関の式台で見送った朝、そのどれを振返っても、おばば様と呼んでいる人が自分の生みの親であり、母様と呼んでいる母屋の人が他人であるような気がし、ずい分大きくなるまでも苗はその思いから逃れられなかった。

その時分の藩士の子弟の教育は、男子ならば七、八歳頃から個人的に素読の師につくかまたは藩の教授館に入るかするのが普通だが、女子に対しては各家ともまちまちで、一般に余り金を掛けないで読み書き程度を身に付けさせる風があった。

苗の手習いも、系統立った学問とてはないものの、暇々に祖母から仮名を教えて貰い、和歌を習い、そのうち父に呼ばれて少しずつ漢籍を読むようになったが、克巳にも女子の手習い、と云う気があったのか、手本とするのは「孝」を教える言葉ばかり、先ず「孝」は百行の本から始まって、「孝子孝孫」、「孝子賈しからず」、「孝子日を愛しむ」などと短いものから教えればしぜん合点も早いし進みかたも早かった。

が、そのうち、

「孝子父の美を揚げ、父の悪を揚げず」
と次第に字も多く文章も難しくなり、周書の「孝魚の泉」や後漢書の「孝女曹娥伝」をようよう経て論語の、
「子游、孝を問う。子曰く、今の孝なる者は是れを能く養うと謂う。犬馬に至るまで皆能く養うこと有り。敬せずんば何を以て別たん乎」
まで来たとき意味がよく判らず、父の説明の、
「親に対し、その身を養うとか物を贈るとか、形だけの孝行は犬猫であろうとやれる事じゃ。大切なのは心から親を敬う気持、これあってこそ人間と云える」
と聞いて、苗は自分がまるで罪人でもあるかのように深く視線を伏せた。
苗が現在心から敬っているのは祖母の袖であって、父は兎も角、母に対して格別慕わしい思いの湧かないのを真直指して叱責されたような気がしたからであった。読み書きの初めから繰返し「孝は人の道」を教えられ続けていれば、ものの思案はすべて孝の字の箱のなかに閉じ込められたような按配になり勝ちで、苗も子供ながら母よりも祖母の好きな自分をどれほど恥じた事だったろうか。それが哺乳筒の話を聞いて以来ふわりと心が軽くなったのは、日がな一日自分を看取り、夜がな夜知らず米の粉を挽いて自分を養ってくれた祖母なら実の親以上の恩がある筈、と思った故で、そう気付けば何のうしろめたさも感じず袖を慕い、またその気持の拡がりから、母屋の母様の傍へも心いじけず寄って行けるように思った。
母の秀乃は、嘉永三年に苗を産んで以来ずっと病いの床にいたが、帯屋町にある藩の医学席沢流館の医師の薬が効いたのか、或いはそれ以上に、世間から「沢村の病い嫁」と指差されるが嫌さの気力が勝ったのか、その後次第に快くなり、苗とは五つ違いの妹愛子、その二つ下に弟信之

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com